

黒い玉、白い玉      アイヌ

パナンペがいた。ペナンペがいた。

ある日、パナンペは、お腹が空いたので、浜辺へ食べ物を探しに行きました。すると、砂浜に、見たこともない大きな皮袋かわぶくろがありました。

「これは何だなん」

パナンペは、右の手で皮袋をパンとたたきました。すると、手は、皮袋にびったりくっついてしまいました。びっくりして、今度は左の手でパンとたたきました。すると、左の手も皮袋にくっついてしまいました。そこで、右足でポンとけつたら、右足がくつききました。左足でポンとけつたら、左足がくつききました。パナンペは、身動きが取れなくなって、砂浜の上を転げまわりました。

そこへ、大きな鬼おにが、大きなかごを背負って、にたにた笑いながらやって来ました。そして、

「おれのわなえものの獲物」とつぶやきながら、パナンペを皮袋からもぎ取って、なわでぐるぐるしばって、かごに放りこみました。鬼は、かごを背負って、ずんずん川上かわかみへ向かって行きました。

川上に、鬼の住む大きな家がありました。家では、六匹の小鬼たちが留守番をしていました。鬼は、帰って来ると、

「さあ、みんな見ろ。きょうはおれのわなに獲物があつたぞ。こんなにおいしそうな人間がかかっていた」といって、パナンペを下ろして、重さをはかりました。パナンペは、わざと体を軽くしました。鬼はふしぎそうな顔をして、耳をぴくつかせて考えこみました。

「すぐにこいつを煮にて食おうと思ったが、あまり肉がついてないようだ。しかたがない。晩まで炉ろの上にぶら下げておこう」

そして、小鬼たちに、

「おれは、山へ食べ物を探しに行つて来る。おまえたち、よくこいつの番をしておれ。こいつが何をいっても、けつしてなわを解といてはならんぞ」といって、山へ出かけて行きました。

しばらくたって、パナンペは、小鬼たちにいいました。

「おまえたち、このなわを解いてくれたら、ちっちゃい弓と矢をこしらえてやるぞ」

小鬼たちは、喜んで、パナンペを炉の上から下ろしてなわを解きました。パナンペは、

「おまえたち、おやじの自慢じまんの宝物をみな出して見せてくれないか。そうしたら、約束どおり弓と矢をこしらえてやる」といいました。

小鬼たちは、てんでに、鋭い刃の太刀たちや、革かわの小舟こぶねや、黒い糸玉や白い糸玉を出して来ました。

「これは、どう使えばいいんだ」と、パナンペがたずねると、小鬼たちは、得意がつてぺらぺら答えました。

「この太刀は、どんなに硬い木でも石でも、一刀のもとに断ち切ることができるんだ」

「この革の小舟は、広げると十人でも二十人でも乗って、海でも川でもどこまでも行けるんだ」

「この黒い糸玉と白い糸玉は、敵に追いかけられたとき、黒い玉を後ろへ投げると、黒い雲がわっと立ちこめる。白い玉を前へ投げると、行く手が明るくなって、わけなく逃げられるんだ」

パナンペは、うれしくてたまりません。

「さあさあ、おまえたち、順々に並べ。背の高い者は高い者用の、背の低い者は低い者用の、それぞれに合った弓と矢を作ってやろう」

パナンペがいうと、小鬼たちは一列に並びました。

パナンペは、太刀を取って、小鬼たちの首を一刀のもとに切り落としました。そして、大なべに水を入れて炉にかけ、小鬼たちを煮てしまいました。それから、鬼の宝物をふところに入れて、炉の炭火に化けて待っていました。

やがて、鬼が帰って来ました。小鬼たちがいません。いいにおいがするのでなべをのぞきこむと、おいしそうな汁がたつぷりありました。鬼はともにお腹が空いていたので、食うわ食うわ、あつというまになべからを空にして、なべの底をなめました。それから、顔をしかめて、

「おれの味がする」といいました。見上げると、炉の上にパナンペがいません。あわて、宝物の箱を見ると、中からはらっぱでした。

「憎いパナンペ、悪者パナンペ。よくも小鬼たちをだましてなわを解かせたな。どこに隠れているんだ」

鬼は、炉の炭火を数えはじめました。今にも見つかりそうになったとき、パナンペは、灰に化けました。鬼は、炭火を数え終わると、今度は灰を数えはじめました。また見つかりそうになったとき、今度は壁に練りこんだ茅かやの一本に化けました。鬼は、灰を数え終えて、茅を数えはじめました。パナンペは、どうしようもなくなつて、

「アハハ―イ」とさけんで、笑いころげながら、大川めがけて逃げだしました。そして、革の小舟を広げてとび乗りました。鬼は、川にザンブととびこんで、泳いで追いかけてきました。パナンペは、後ろに黒い糸玉を投げようとしてました。ところが、鬼が川の水をガボガボと飲みほしたので、舟が動かなくなりました。パナンペは、すっかりあわてました。鬼はまたたく間にすぐそこまで迫ってきました。そのとき、パナンペは、舟の中に立ちあがつて、おしりをまくつて鬼のほうに突き出すと、プツプツと、続けさまにおならをしました。鬼は、びっくりして、笑いころげました。すると、鬼の口から、さつき飲んだ川の水が、ガボガボと出てきて、川はもとのように流れだしました。舟は走り、鬼は、うんうんいいながら追いかけてきました。パナンペは、急いで黒い糸玉を後ろへ投げました。すると、まっ黒な雲が立ちこめて、川一面をおおいました。パナンペは、そのまに、舟をこぎにこいで、やっと家に帰りつきました。鬼は、あたりがまっくらで何も見えず、パナンペを追うことも家に帰ることもできません。やみくもに泳ぎまわつて、疲れはててくたばつてしまいました。

それからというもの、パナンペは、革の小舟で漁に出て、魚をどっさりとりました。クジラでもサメでも、鬼の刀で一刀のもとに手に入れました。赤い肉白い肉を、家の内にも外にもいっぱい積んで、ごちそうざんまいに日を送りました。

ある日、ペナンペがやつて来て、

「おい、パナンペよ。おまえは、おれと同じように貧乏びんぼうだったのに、どうしてこんな金持ちになったんだ」とききました。パナンペは、

「こつちへおいで。食べながら話してやろう。おまえもその通りにして、うんともうけるといい」といって、これまでのことを話しはじめました。ペナンペは、とちゅうまで聞くと、

「憎いパナンペ、悪いパナンペ。おれをまんまと出しぬきやがつて」といって、戸口にうんこをして、おしっこをかけて、跳ねながらすつとんで帰っていきました。パナンペは、かんかんに怒って、

「おれがどんな悪いことをいった。憎いペナンペ、悪いペナンペ。なぜこんなひどいことをする。なんとでもして見る。きつとうまくいくだろうよ」といいました。

ペナンペは、浜辺に行きました。すると、大きな皮袋がありました。

「これは何だ」

ペナンペは、右の手で皮袋をパンとたたきました。すると、手は、皮袋にぴったりくっついてしまいました。びっくりして、今度は左の手でパンとたたきました。すると、左の手も皮袋にくっついてしまいました。そこで、右足でパンとけたら、右足がくつききました。左足でパンとけたら、左足がくつききました。ペナンペは、身動きが取れなくなって、砂浜の上を転げまわりました。

そこへ、大きな鬼が、大きなかごを背負って、にたにた笑いながらやって来ました。そして、

「おれのわなの獲物」とつぶやきながら、ペナンペを皮袋からもぎ取って、なわでぐるぐるしばって、かごに放りこみました。鬼は、かごを背負って家に帰りました。それから、六匹の小鬼たちによくいつけて、山へ出かけて行きました。

ペナンペは、六匹の小鬼たちをだまして宝物を手に入れました。それから、炭火に化け、灰に化け、しまいに茅に化けて逃げだしました。鬼が追いかけてくると、おしりを出しておならをしました。鬼は笑いだし、ペナンペは、また舟をこいで逃げました。今にも追いつかれそうになったとき、あわてて、白い糸玉を後ろへ投げ、黒い糸玉を前に投げました。それで、鬼のいるところは明るくなり、ペナンペのいるところはまっくらになりました。ペナンペがうろうろしていると、鬼は大喜びでペナンペをひっつかまえ、

「うん」と、ひと飲み飲みました。

「だから、これからのペナンペたちよ、決して人に逆らってはいけないぞ」

そうペナンペがいました。

村上郁再話

資料『アイヌの昔話』稲田浩二編／筑摩書房